

企画・編集：坪山尚寛 近畿大学医学部 放射線医学教室放射線診断学部門

序説

疾患に関する知識は、先人たちのたゆまぬ努力によって膨大に集積され、私たちはそこから実に多くを学んでまいりました。それでもなお、日々の臨床のなかで、私はこう思わずにはいられません。なぜ、これほどまでに鑑別診断に悩み、正しく診断することのできない症例に次々と遭遇するのだろうか、と。疾患の画像所見はバリエーションに富み、教科書に「典型的」として掲げられる所見を、実際の症例が素直に呈してくれることは、決して多くありません。むしろ、書き物や試験問題を作成する際に典型的な症例を探し出そうとすると、思いのほか苦労させられます。これは裏を返せば、「典型的」ではない症例こそが日常臨床にあふれているためにほかならないのでしょうか。私たちが真に診断力を高めるためには、整えられた典型像を眺めるだけでなく、そうした多彩な疾患の姿にどれだけ数多く触れ、引き出しを増やしていくかが問われるように思います。

本特集は、読者の皆様に、代表的な子宮疾患のさまざまなバリエーションへ一度に触れていただく機会を提供したい、そうした思いから企画いたしました。子宮内膜癌や子宮頸癌、子宮筋腫、子宮腺筋症、子宮内膜ポリープといった頻度の高い疾患から、子宮癌肉腫、平滑筋肉腫、子宮内膜間質肉腫、悪性リンパ腫、分葉状頸管腺過形成、癒着胎盤、さらには遺残絨毛組織・胎盤ポリープといった、比較的まれながら日常臨床で出会う可能性のある疾患に至るまで、幅広く取り上げております。同じ疾患であっても、発生日位や造影パターン、拡散制限の程度、あるいは患者背景などによって、その表情は驚くほど多彩に変化します。良性と悪性の境界が判然としない症例や、予想を超えて進展していた症例も少なくありません。

著者の先生方には、あえて「きれいな」典型例にこだわらず、ご経験のなかで印象に残る症例や、教育的に価値のある症例をご提示くださるようお願いいたしました。私が日ごろより信頼を寄せる素晴らしい先生方にご執筆いただき、私の意図をはるかに超える、示唆に富んだ数々の症例をお寄せいただきましたことに、この場を借りて心より御礼申し上げます。いずれの稿も、単なる典型像の解説に留まらず、先生方が実臨床のなかでどのように所見を読み解き、診断へと近付いていかれたのか、その思考の道筋までを追体験できる、得がたい内容となっております。

1つの疾患であっても、その姿は決して一様ではありません。多くの症例に触れ、さまざまな角度から同じ疾患を眺めていただくことで、読者の先生方が診断の「地力」を「もっと伸ばせる」一助となれば幸いです。本特集が、皆様の日々の臨床にきつとお役立っていただけるものと確信しております。

坪山尚寛